

地域薬剤師による新たなセルフメディケーション支援の可能性

小嶋慎二（コジマ薬局 アポネット R 研究会 世話人）

セルフメディケーションとは、軽度の症状や病気に対して、OTC 医薬品を使用して対応することではあるが、症状が持続する・深刻である場合、いくつもの薬をためしても効果がない、望まない影響を経験した症状が深刻であると考えられる場合には、医師に意見を聞くべきとされている。また、医師と地域薬剤師には患者（生活者）に対し、セルフメディケーションと医薬品の合理的な使用に関する援助やアドバイス、情報の提供者として、非常に重要な役割があるとされている。

しかし、現状では OTC 医薬品を使用する際に薬剤師などからの助言を重視する生活者は必ずしも多くない。また、セルフメディケーションを支援する側の地域薬局や地域薬剤師にもこのことが十分に行えないさまざまな事情や制度的な課題がある。これらの課題をなるべく早く解決するとともに、セルフメディケーション支援を行うのに必要なサポート体制が必要である。

一方、セルフメディケーションはセルフケアの一つであり、セルフケアの支援となる情報の提供、疾病予防・健康教育・健康管理・メンタルヘルスなどの Public Health 的活動、くすりや医療への関わり方についての啓発といったことも必要である。

国内外では、禁煙支援や生活習慣病などのスクリーニングや予防・啓発、メンタルヘルスなど、地域薬局が関わるさまざまな Public Health 的活動がすでに報告されているが、まだ認知が少ないのが現状である。

まずは、行政に健康増進や疾病の予防と早期発見に地域薬局や薬剤師の活用が可能なことを認識してもらうとともに、セルフメディケーションに関わる時間的余裕の確保、患者・生活者向け資材の統一化、生涯学習の充実などが求められる。そして、職能団体は先進的な活動を生活者や現場の薬剤師に繰り返し伝えて、新たなセルフメディケーション支援の可能性の認識を共有することが必要である。